

中学 2 年 国語科 教材別テスト② アイスプラネット 模範解 答・解説

教材別リメイク版 中学 2 年 国語 / 椎名誠「アイスプラネット」(光村図書『国語 2』)

【このテストの使い方】

本文は載せていません。教科書『国語 2』(光村図書)の「アイスプラネット」のページを開いたまま解答します。この作品は、中学生の「僕」が語り手となる一人称の小説です。人物像のとらえ方と「僕」の心の変化(成長)を読み取ることが中心になるため、記述問題を多めにしています。抜き出しではなく、自分の言葉でまとめる練習をしましょう。

配点一覧

観点	大問	内容	配点
知識・技能 50点	一	漢字の読み書き(20問)	1点×20=20点
	二	語句の知識(語の意味・慣用句・対義語・熟語の組み立て)	2点×7=14点
	三	文法(動詞の活用の種類・活用形)	2点×8=16点
思考・判断・表現 50点	四	「アイスプラネット」の読解(12問)	50点
合計			100点

【出題のねらい】

- ① 動詞の活用の種類(五段・上一段・下一段・カ行変格・サ行変格)と活用形(未然・連用・終止・連体・假定・命令)を区別できるか。
- ② 「ぐうちゃん」という人物像と、「僕」との距離感を、呼び名や行動からとらえられるか。
- ③ 「ほら話」だと決めつける「僕」の心理と、同級生に話して恥をかいた出来事の意味を説明できるか。
- ④ 「アイスプラネット」が広い世界・自分の目で見ることの価値を象徴していると気づけるか。
- ⑤ 手紙と写真をきっかけとした「僕」の変化(成長)を、指定字数でまとめられるか。

一 漢字の読み書き (1点×20=20点)

番号	解答	番号	解答
①	いそうろう	⑪	胸
②	わくせい	⑫	涙
③	ひょうが	⑬	海岸
④	ぬま	⑭	遠慮
⑤	す(んだ)	⑮	冒険
⑥	あせ(る)	⑯	冗談
⑦	は(ずかしい)	⑰	信用
⑧	さび(しい)	⑱	習慣
⑨	こうや	⑲	確かめる
⑩	ただよ(う)	⑳	成長

小計 20点

【注意したい字】

①「居候」は特別な読み。「いこう」「きょこう」としないこと。②「惑星」の「惑」は「或」＋「心」。「惑星」と書く誤りに注意。⑤「澄んだ」は「すんだ」。「とんだ」「きよんだ」ではない。⑦「恥ずかしい」は送りなが「ずかしい」。「恥かしい」は×。⑧「寂しい」は「さびしい」(「さみしい」も可とするが、まずは「さびしい」で覚える)。⑩「漂う」は「ただよう」。⑫「涙」はさんずい。⑭「遠慮」の「慮」は「虍」の下に「思」。⑯「冗談」の「冗」は「几」の上に「乚」。「上談」「情談」は×。⑲「確かめる」は送りながまで必要。「確かめる」は×。⑤⑥⑦⑧⑩⑱は送りながが必要。

二 語句の知識 (2点×7=14点)

番号	解答	解説
(1)	イ	「居候」＝他人の家に住み、食事などの世話をしてもらっている人。この作品では、ぐうちゃんの立場そのものを表す重要語。ア「宿屋」エ「独り暮らし」では、他人の家にいるという条件を満たさない。
(2)	ア	「ほらを吹く」＝大げさな作り話をする。「ほら話」はその名詞形。イ・ウは「ほら貝を吹く」という字面からの誤り。
(3)	ウ	「目を丸くする」＝とてもおどろく。ア「鼻が高い」＝得意になる。イ「耳が痛い」＝弱点を指摘されてつらい。エ「顔が広い」＝知り合いが多い。
(4)	舌	「舌を巻く」＝おどろき、ひじょうに感心する。「口」「手」は×。漢字で書けていることが条件。
(5)	イ	現実⇔理想。ア「事実」エ「真実」は現実に近い類義語なので誤り。ウ「想像」は「現実」の対として使うことはあるが、対義語としては「理想」が基本。
(6)	到着	出発⇔到着。「到」の字形(「至」＋「リ」)に注意。「倒着」は×。
(7)	ウ	「氷河」＝「氷の河」で、上の字が下の字を修飾する組み立て。同じものは「温水」(温かい水)。ア「高低」は反対の意味、イ「読書」は「書を読む」で下が目的、エ「国立」は「国が立てる」で主語・述語の関係。

小計 14点

三 動詞の活用 (2点×8=16点)

番号	——線部	解答	解説(見分け方)
(1)	吹く	五段活用	「ない」をつけると「吹かない」。直前がア段になるので五段活用。
(2)	起きる	上一段活用	「起きない」。直前がイ段になるので上一段活用。
(3)	跳ねる	下一段活用	「跳ねない」。直前がエ段になるので下一段活用。
(4)	来る	カ行変格活用	「来る」一語だけの特別な活用。こ・き・く・くる・くれ・こい。
(5)	(旅)する	サ行変格活用	「する」と「～する」(旅する・勉強するなど)だけの特別な活用。
(6)	見	連用形	下に「た」が続いている。「た・て・ます」に続く形は連用形。
(7)	読め	假定形	下に「ば」が続いている。「ば」に続く形は假定形。命令形の「読め」と形が同じなので、下に何が続くかで判断する。
(8)	進め	命令形	そこで言い切り、命令する形になっている。(7)の「読め(ば)」と形は似ているが、「ば」が続かないので命令形。

【動詞の活用を見分けるコツ】

- ① 活用の種類は「ない」をつけて、直前の音がア段→五段／イ段→上一段／エ段→下一段。ただし「来る」＝カ行変格、「する・～する」＝サ行変格は先に例外として覚える。② 活用形は、その語のあとに続く言葉で決まる。ない・う・よう→未然形／た・て・ます→連用形／言い切り→終止形／体言（名詞）→連体形／ば→假定形／命令して言い切り→命令形。③ 五段活用の「～え」の形は、假定形と命令形で同じ形になる。「ば」があるかどうかが目。

四 「アイスプラネット」の読解 (50点)

番号	解答	解説・採点のポイント
(1) 4 点	イ	ぐうちゃんは母の弟(＝「僕」のおじ)で、定職を持たず「僕」の家の部屋に居候している独身の人物。アは「父の兄」「会社経営」が誤り。エ「下宿人」は家賃を払って借りている人で、居候とはちがう。
(2) 3 点	ウ	「ぐうちゃん」というくだけた愛称は、親しさと、何をしているかよく分からない人物へのあきれ・軽い見下しが同時にこもった呼び方。「僕」とぐうちゃんの距離の近さと、まだ対等でない関係がここに表れている。アは「尊敬・あらたまった扱い」が逆。イ・エは、家族と話をしている場面と合わない。
(3) 4 点	(例) 定職につかず家に居続けることを心配しているため。(24字)	「働いていない／定職がない」(2点)＋「心配している／このままではいけないと思っている」(2点)の二点で採点。 「きらいだから」「じゃまだから」のように、嫌悪だけを書いたものは1点。母は姉として弟の将来を気にかけている。「～ため。」の形で結んでいないものは－1点。二十五字を超えたら－1点。
(4) 4 点	イ	「僕」は中学生で、家と学校というせまい世界しか知らない。だから、自分の経験の枠からはみ出す話は「ありえない＝ほら話」としか受け取れなかった。これは「僕」の側の限界であり、ぐうちゃんがうそをついていたわけではない。アは本文と合わず、ウ・エは根拠がない。
(5) 5 点	(例) 同級生に笑われて恥をかき、ぐうちゃんにだまされてくやしいという気持ち。(35字)	「同級生に笑われて恥をかいた・きまりが悪い」(2点)＋「だまされたと感じ、腹を立てる／うらむ」(3点)の二点で採点。 「おもしろかった」「どうでもよくなった」は0点。ぐうちゃんへの不信が強まったという向きが書けていることが条件。「～という気持ち。」で結んでいないものは－1点。二十五～三十五字から外れたら－1点。
(6) 4 点	ウ	巨大なナマズやアナコンダの話は、世界の広さ・不思議さを示す具体例であり、同時にそれを受け入れられない「僕」の幼さを読者に見せる働きをしている。つまり、のちの「僕」の変化を際立たせるための前ふり。アのように人物を否定するためではない。
(7) 4 点	イ	「アイスプラネット(氷の惑星)」は、実際の天体の話ではなく、「僕」がまだ自分の目で見ていない広大な世界の象徴。「自分の目で確かめることには価値がある」という主題と直結する。ウの環境問題、エの「子どものころの夢」は本文の内容ではない。

四 「アイスプラネット」の読解（つづき）

番号	解答	解説・採点のポイント
(8) 3 点	エ	一人称の語りでは、読者は「僕」の見方・思いこみごと物語を体験する。だから、「ほら話だ」と決めつけていた見方がくずれる瞬間のおどろきを、読者も一緒に味わえる。アは三人称全知の語りの特徴なので誤り。
(9) 4 点	ウ	「僕」は、ぐうちゃんがいなくなっても平気なふりをするが、実際には張り合いのなさ・寂しさを感じている。けんかのように別れてしまったことへの後悔もふくまれる。ア「心からほっとしている」、イ「すっかり忘れ」は、強がりの裏側を読めていない。
(10) 5 点	(例) 世界は広く、自分の目で実際に確かめることが大切だということ。(30字)	「世界は広い／ほら話ではなかった」(2点) + 「自分の目で見て確かめることが大切だ」(3点) の二点で採点。 写真は「ほら話が本当だった」という証拠であり、手紙での呼びかけとあわせて、「僕」自身が出かけていくことをすすめるメッセージになっている。「ぐうちゃんは元気だということ。」のように近況報告だけにしたのは1点。「～こと。」で結んでいないものは－1点。二十五～三十五字から外れたら－1点。
(11) 6 点	(例) ぐうちゃんの話信じ、自分の目で広い世界を見たいと思うようになった。(34字)	「ぐうちゃんの話疑わなくなった／信じるようになった」(3点) + 「自分も世界を見に行きたい・経験したいと思うようになった」(3点) の二点で採点。 「前は～だったが、今は～」という変化の形になっていれば、表現は自由。「ぐうちゃんが好きになった」だけのものは2点。「写真を見ておどろいた」のように出来事をなぞっただけのものは0点。二十五～四十字から外れたら－1点。
(12) 4 点	ア・ウ・オ	ア・ウ・オは「私」「僕」「ぼく」と語り手自身が登場人物として語る一人称の文なので○。イは「彼」、エは「少年」と、語り手が外から人物を見て語る三人称の文なので×。ア・ウ・オの三つそろって4点(完答)。一つでも足りない、または余分があれば0点。

思考・判断・表現 合計 50点 / 総合 100点

【この教材で落としやすいポイント（8つ）】

1. ぐうちゃんは母の弟。「父の弟」「近所の人」とまちがえやすい。居候という立場も必ず押さえる。
2. 「ぐうちゃん」という呼び名そのものが、親しさとあきれという「僕」の二重の気持ちを表している。
3. 「ほら話」だと決めつけたのはぐうちゃんの落ち度ではなく、「僕」の世界がせまかったから。責任の向きをまちがえない。
4. 同級生に笑われた出来事は、単なる失敗談ではなく、「僕」の不信を決定的にするための場面。
5. 「アイスプラネット」は象徴。氷の惑星そのものの説明を求められているのではなく、広い世界・見ることの価値を答える。
6. ぐうちゃんの旅立ちのあとの「僕」は強がっている。表面の言葉と本当の気持ちが逆向きになる。
7. 手紙と写真は、「ほら話が本当だった」という証拠と、「おまえも自分の目で見に行け」という呼びかけの二つの意味をもつ。両方書けて満点。
8. 記述は出来事のなぞり書きでは0点。「～という気持ち。」「～こと。」「～ため。」と、問いに対応した形で結ぶこと。

